

## シンポジウム

### 公開シンポジウム「人知の営みを歴史に記す

### 中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」報告記

小澤 実

本シンポジウムは、二〇一二年七月六日（金）と翌七日（土）の二日間にわたり、立教大学池袋キャンパス太刀川記念館三階多目的ホールにおいて、立教大学文学部史学科の主催、立教大学史学会の共催により開催された。ルネサンス思想史という分野において世界の学界をリードし、七月一日から一日まで立教大学招聘研究員として本学に滞在されたナイメーヘン大学科学史哲学史研究所のヒロ・ヒライ博士の来日にあわせての企画である。

従来、西洋思想の歴史は、近代的な価値観に基づき、プラトンやアリストテレスを擁するギリシア・ローマ時代を出発点とし、信仰に基づく非合理的な中世・ルネサンスをへて、デカルト革命以降の理性的かつ合理的な近代世界へと移行するという、一種発展段階的かつ単線的な理解のもとに描き出されてきた。しかし非合理的と思われた中世・

ルネサンスは、実のところ、ギリシア・ローマの思想をその時代独自の作法で読み解き創造的に解釈する知的に豊かな時代であったという理解へと、近年の研究はシフトしつつある。若い世代に属するこのような新しい研究潮流の担い手九名が一堂に会し、従来型の哲学史や思想史ではなく、まさに新しい知がいまそこで生成しつつある分野横断的なインテレクチュアル・ヒストリーの現場を開示することを目的としたのが、本シンポジウムであった。

インテレクチュアル・ヒストリーのあたらしさのひとつは、別個の学問分野として対話することの少なかった哲学史、科学思想史、美術史、建築史、一般史、文学、神学、テクスト研究といったディシプリンが交錯する点にある。しかしそのみならず、西洋思想の歴史において正典からこぼれ落ちたマージナルな内容として等閑に付されていた



説教、古物論、神学書、建築書、医学書、自然科学書、記憶術書といったテクスト群に光をあて、中世・ルネサンスという時代に展開された独自の知的世界を再現するという点でも特筆に値する。方法論の融合と対象テクストの革新は、歴史に記されそして忘却されていた人知の営みを現代世界へよみがえらせ、歴史記述に変更を迫るのではないだろうか。本シンポジウムは、ヒライ博士が一〇年以上にわたって運営している学術サイト *Bibliotheca Hermetica* に凝縮されている開かれた知的態度と呼応する。

そのような意気込みのもと準備された本シンポジウムには、クレア・ヒライ氏のデザインによる美しいポスターによる告知のおかげもあり、両日あわせてのべ百名を超えるであろう参加者を得ることができた。いずれの報告内容に対してもフロアから鋭いコメントや質問が相次ぎ、会場が一体となって知的興奮を体験することができた。当日は、日本における西洋精神史の普及に多大な貢献をしつづけている勁草書房、工作舎、白水社、八坂書房によるブックフェアが開かれる一方で、懇親会ではシンポジウムがなお続いていくかのような知的な熱気が継続していた。二日間にわたり太刀川記念館は文字通りシュンポジオンⅡ饗宴という言葉にふさわしい場であった、と企画者ならびに報告者の一人として思う。

「人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」報告記（小澤）

以下では、報告者各人が執筆した本シンポジウムでの報告要旨を掲載する。

一日目 七月六日（金）一五時から一八時

### 第一報告

説教と学問的手続き…中世後期における説教者たちの葛藤

赤江雄一（慶應義塾大学文学部助教）

異端運動をも生み出した一一世紀末以降の激しい教会改革運動を経て、民衆に正統信仰の定着をはかるために教皇権の主導の下で一三世紀初頭に設立された托鉢修道会は、修道士たちを優秀な説教者へと教育・訓練し、膨大な量と多様な種類の説教著述支援著作を生み出した。ほぼ同時期に「新説教形式」と呼ばれる説教形式が生まれ、宗教改革の時代まで発展しながら、さかんに用いられていく。本報告は「新説教形式」の発展と、それが説教者たちにもたらした葛藤を、説教執筆の理論的著作である説教術書と実際の説教に注目することで描いた。具体的に分析の俎上に載せられたのは、一三世紀後半のウエールズのジョンの説教術書、一四世紀前半のベイスヴォーンのロバート（一三世紀後半から一四世紀前半）の説教術書、そして一四世紀後半に著述されたジョン・ウォールドビー（一三二五頃—



赤江氏

一三七二頃)の説教集である。

理論的叙述であるベイスヴォーンの著作と説教執筆の実践であるウオルドビーの著作は説教形式についての認識が詳細に至るまで一致しており、一四世紀前半までに發展した特定の新説教形式のあり方を反映している。しかし両者のあいだには、語的一致というテクニクに対する態度に大きな違いがある。このテクニクを初めて明確に論じたウエールズのジョンの説教術書とベイスヴォーンのそれを比較すれば、両者とも語的一致に対して否定的であり、この点について歴史的変化はない。しかし、前者には見られないベイスヴォーンの自己弁明的な論の運びは、二人の置かれていた環境の変化を示す。すなわち一四世紀前半までに語的一致の使用を当然とする学識ある説教者たち(ウオルドビーも含む)のコンセンサスが成立していたのである。語的一致は当時における最も高度な教育を受けていた説教者たちには理解できても、必ずしもそうした教育を受けていない民衆には無用の説教術であった。ベイスヴォーンの立論は、学識ある説教者が民衆に語るときに生じる葛藤をさらけ出している。

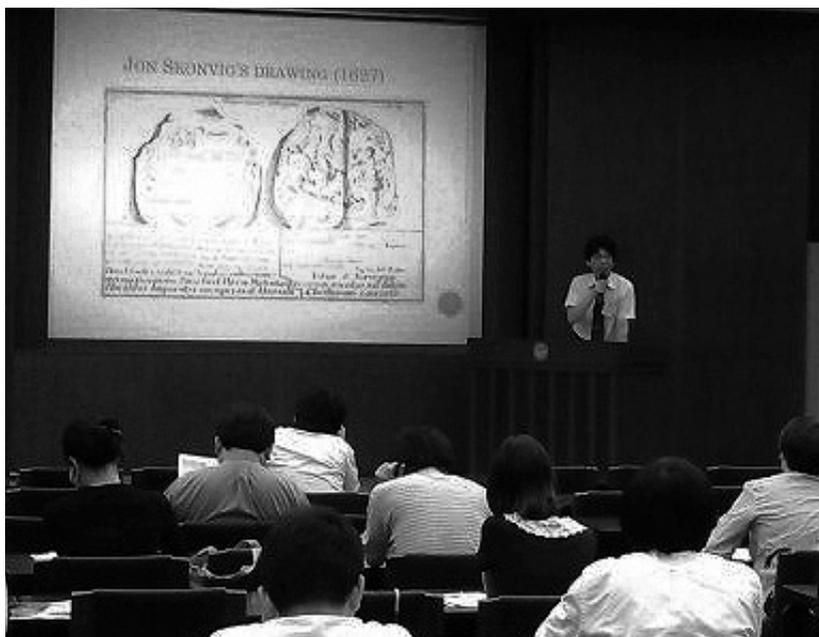
## 第二報告

ゴート・ルネサンスとデンマーク・ルーン学の成立 オラウス・ウォルミウスの著作を中心に

小澤実 (立教大学文学部准教授)

中世末期よりイタリア半島において展開された古典古代期の文化復興運動がヨーロッパ各地に転移する一方で、北ヨーロッパの非ローマ化地域においては、現地にあったとされる文化の復興を推し進める動きが盛んとなった。その起源として措定したゴート人の文化の再発見にエネルギーを注いだスカンディナヴィアにおけるゴート・ルネサンスもそうした動きのひとつである。そのゴート・ルネサンスの中核的要素としてゴート人の文字と考えられたルーン文字の再発見を認めることができる。この点に関して従来(一五六八—一六五二)の役割が強調されてきたが、本報告ではデンマークのオラウス・ウォルミウス(一五八八—一六五四)の事例を取り上げ、デンマーク固有のルーン文字再発見の具体層を再現した。

デンマークにおいてルーン文字の歴史的的重要性が認識されたのは一五八六年に、一〇世紀のデンマーク王ハーラル青歯が建立したイェリング石碑が再発見されたことに端を発する。この出来事によるデンマークにおいてもルーンに



小澤氏

対する関心が高まり、とりわけコペンハーゲン大学医学部教授であったウォルミウスは、デンマークに残されたルーン碑文を収集させ、いくつかの研究論考を刊行したのち、『デンマークの古遺物に関する六書』（一六二八年）を完成させた。本書は、当時デンマーク王の支配下にあったデンマーク本土、ノルウェー、スウェーデン南部、ゴットランド島のルーン碑文を中心とする古遺物を収集し分析した初の体系的ルーン研究書であった。それではなぜこのような研究書の成立が可能となったのか。とりわけイェリング石碑を扱った章の分析に基づくならば、第一に図書館に所蔵された文献調査による来歴の調査、第二に書簡ネットワークを通じての知識の集積、第三に国王による古古物情報を収集する法令、第四に写生画家による図版の利用という、いずれも特殊近似的な知識集積システムを利用することで得られた成果であった。

### 第三報告

聖餐論（聖体拝領論）をめぐる表象の位相 文学と神学の交錯点（ラブレールからド・ベーズまで）

平野隆文（立教大学文学部教授）

一六世紀を通し、聖餐論をめぐる闘わされたペンによる論争が、終に剣による宗教戦争へと発展した、という



平野氏

見方は図式的にすぎるが、その図式性を脱臼させるに足る無数の文献が存在するのも事実である。カトリックの全実体変化論との距離の取り方により、様々に分類される神学的見解が、ルター（一四八三—一五四六）、ツヴィングリ（一四八四—一五三一）、カルヴァン（一五〇九—一五六四）、ド・ベーズ（一五一九—一六〇五）等々により唱えられたのは周知の事実である。だが同時に、神学的な立論は、当時の様々な文学作品の内部に浸潤し、独特の表象を獲得している。たとえばラブレール（一四八四頃—一五五三）は「ミサ」と「説教」を対立させる構図で、ロンスール（一五二四—一五八五）は神と人間との距離の無限性に批判の矛先を向ける方法で、モンテーニュ（一五三三—一五九二）は懐疑主義の立場から不可知論を示唆する論法で、ヴェルステガン（一五五〇—一六四〇）による『残酷劇場』（一五八七年）は記憶術と密接した力動的図像（*imago agens*）に訴える手法で、各々カトリックの立場を補強している。他方、反実体変化論の立脚点から発言した、新教側のド・ベーズやアグリッパ・ド・ビニエ（一五五二—一六三〇）たちは、「神食らい」（テオファジー）を、排便に至る肉体的下層性と繋げ、スカトロロジーの駆使に訴えて、摂取される聖体の物質性に批判の焦点を絞る。さらに、「旅行記」の分野では、テヴェ（一五〇三—一五九二）や

「人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレクトュアル・ヒストリーの挑戦」報告記（小澤）

ド・レリー（一五三六—一六三〇）が、共同体の紐帯の再構築という観点からカンニバルの儀式と聖餐式とを等号で括ろうとする。つまり、神学の抽象的概念を、文字列による「具象性」に変換する多様な描出法が立ち上がる。本稿は、その喚起力に注目し、一見、拝領論とは無縁に映る文学の景色に解析のメスを入れ、一方で聖餐式の根拠をイマージュに結実させる詞藻の才腕を抽出し、他法で、聖体拝領を、冒瀆の儀式に転倒させる筆法に至るまでを俯瞰することを目指した。以上の論考を経て、聖餐論が、実は霊肉をめぐる記号論的懸隔の問題に、ひいてはキリスト教における供儀の位置づけのテーマに集約されることを、十二分に示し得たと思われる。

二日目 七月七日（土）一〇時から一七時

第四報告  
アリストテレスを救え 一六世紀のスコラ学とスカリゲルの改革

坂本邦暢（日本学術振興会特別研究員）  
本報告では、一六世紀のアリストテレス主義者であるユリウス・カエサル・スカリゲル（一四八四—一五五八）の発生論を検討することを通じて、初期近代の自然理解に

二つの相対立する方式が存在したことを明らかにした。古代以来、植物の種子や動物の精液のような認識能力を持たないものが、いかにして有機体という精緻な構造を生むのかということは哲学上の難問であった。この問題に対しスカリゲルは種子や精液のうちにある動植物の靈魂が、まるで建築家が家を建てるように有機体を形づくると論じた。建築家と異なり知性認識を行わない動植物の靈魂が秩序だった形成をなしとげられるのは、神がそれを可能にする指示（言わばプログラム）を靈魂に与えているからだ」とされ



坂本氏

る。スカリゲルはこうして様々な生物種の発生がそれぞれの種に固有の靈魂によつて担われると想定した。これは多数の異なる種類の靈魂を想定するという意味で多元的な發生論であつた。このようなスカリゲルの理論は当時イタリアで勢力を伸ばしていたある傾向性を有するアリストテレス主義に抗する形で構想されたものである。当時イタリアのアリストテレス主義者のあいだでは、動植物の靈魂はみな少数の物質的原理からなるとする学説が広まっていた。この理論は非物質的で人間に感知できない靈魂の存在をしりぞけ、世界を既知の物質的原理から成り立つ理解可能なものとする利点を有していた。一七世紀にデカルトやスピノザが試みたのも、同じく可能な限り少数の原理に世界を還元し、それを理解可能にするための理論の提示であつた。しかしこの説明方式は弱点も抱えていた。靈魂を物質に還元することは、靈魂の不死性というキリスト教の教義に反する可能性があつた。また發生のような複雑な秩序形成過程は、少数の物質的原理の相互作用からは説明できないと、多くの知識人は一七世紀にいたつても考えていた。だからここのような立場に抗し、キリスト教との不一致からアリストテレスを救うべくスカリゲルが構想した多元的發生論が、一七世紀を通じて有力な理論として参照され続けたのである。

## 第五報告

靈魂はどこから来るのか 西欧ルネサンス期における医学論争

ヒロ・ヒライ(ナイメーヘン大学科学史  
哲学史研究所研究員)

生命の起源についての論争は、古代ギリシアの医学者ガレノスの哲学的な著作群がルネサンス期になつてはじめて西欧に紹介されたことに端を発していたといえる。靈魂が身体を構成するとされた四体液のまじりあいから生まれるとガレノスが主張し、さらに誕生時に身体に与えられる特別な熱と靈魂を同一視している作品もあることは、彼の医学体系を受け入れたアラビア世界の医学者たちの著作とおして中世にも知られていた。しかし実際にガレノスの靈魂についての考え方が議論されている著作が、西欧においてまとまつて読めるようになったのは、一五二五年にギリシア語による全集が出版され、そこから各作品のラテン語訳が作られるようになってからであつた。

本発表では、ガレノスの靈魂論の再発見をおして、ルネサンス期の西欧でどのような論争が起こつたのかを、三人の著作家の例をおして考察した。イタリアのルネサンス哲学の強烈な洗礼をうけたフランスの医学者ジャン・フェルネル(一四九七—一五五八)、宗教改革の大波をへ



ヒライ氏

たドイツで活躍した穏健派の哲学者ヤーコブ・シエクあるいはシェキウス（一五一一—一五八七）、そしてルター派の総本山であったドイツのヴイッテンベルク大学で教鞭をとり、その後の思想家たちに多大な影響をあたえたダニエル・ゼンネルト（一五七二—一六三七）である。一六世紀初頭に広まったガレノスの靈魂論の自然主義的な解釈を嫌ったフェルネルは、イタリア由来のプラトン主義に依拠しつつ、靈魂の天界起源説を前面に押し出した。シェキウスは靈魂の起源を神におき、神による毎日の靈魂の創造を唱えた。これら二つの立場を退けつつゼンネルトは靈魂の天地創造時における創造とその後の増殖を主張し、種子のなかの精気によって人間靈魂さえ親子のあいだで伝搬していくことを唱えた。

#### 第六報告

パライソの場所 キリシタン布教と宇宙論

平岡隆二（熊本県立大学文学部准教授）

キリシタン時代（一五四九—一六五〇）の日本に初めて伝来したキリスト教の「パライソ（天国、楽園）」概念は、同時代の諸文献に頻繁に見られるだけでなく、その後の迫害・潜伏期においても脈々と継承された重要な概念として知られる。しかしこの概念の西洋における学問的な背景や、

その日本における展開については、いまだ十分な思想史的  
分析が成されていないようである。本報告では、この概念  
にまつわる日欧の一次史料を整理・分析したが、現在のと  
ころ、以下に要約される結論を得た。

(一) 日欧のイエズス会史料を精査したところ、靈的救済  
の場所としてのパライソを、西洋宇宙論におけるエンピレ  
ウム天(最上天)と同一視するテクストが多く見いだされ、  
またその定義・性質については、同時代ヨーロッパのそれ  
をおおむね踏襲したものであること分かった。(二) パラ  
イソ／エンピレウム天は、宇宙の中で一定の空間を占める  
場所としてだけでなく、世界の創造やデウス・天使・キ  
リストの座と深く関連するものとして位置づけられてお  
り、そのことは日本コレジオで学ぶ神父予備生らにも詳し  
く教えられていた。(三) ハビアン『妙貞問答』のように、  
パライソ／エンピレウム天の同一視を、仏教的な「極楽」  
「浄土」に対する学問的なアンチテーゼとして、すなわち  
西洋の学理によって支持される教説として、日本人読者に  
提案する場合もあった。(四) 単体としてのパライソ概念  
は、後の迫害期にもおらしよのような口頭伝承の形で継承  
されたが、それをエンピレウム天と同一視するテクストは、  
一六四八年の事例を最後として、文献的にも、またおらし  
よの中にも確認できなかった。(五) 本報告では、この同

史苑(第七三卷第二号)



平岡氏

一視を「伝えた（イエズス会）」側に関する史料を分析したが、パラソフ天の最上層という明確な霊的／空間的図式を「受け取った（日本人信徒）」側が残した史料の検討が、今後の課題として残された。

### 第七報告

記憶と方法 シェンケルの『記憶術の宝庫』（二六一〇年）における叡智の家について

桑木野幸司（大阪大学大学院文学研究科准教授）

場所とイメージに基づく人工的記憶強化法たる古典的記憶術は、初期近代に大規模な復活をとげ、印刷技術の発展とともに広まった。情報の器として機能する記憶ボックスは、同時代の建築学の復興と軌を一にするかたちで、洗練と複雑の度合いを増してゆく。しかしながら情報の爆発が頂点に達した一六世紀末から一七世紀初頭、新科学に代表される合理的思考、とりわけペトルス・ラムス（一五一五—一五七二）の主導する「方法」概念の登場により、古臭い記憶術のシステムは一挙に廃れたのだと一般には説明される。

しかしながら、まさにその問題の時期に出版されたL・シェンケル（一五四七—一六三〇頃）による『記憶術の宝庫』（二六一〇年）は、記憶術と「方法」概念とがほんの一瞬、



桑木野氏

創造的な共存関係にあった可能性を示唆してくれる興味深い資料である。シエンケルは記憶ロクスとして、四角い部屋が直線上に連続するシンプルな家を提案する。さらに各部屋の壁面は、記憶する情報の量に応じて繰り返し分割することができ、理論上、無限にトピックを細分することが可能である。シエンケルは更にこのシステムを、学習の「方法」に結びつけて解説する。まず各家には、文法等の個別の学問が割り当てられる。そして各学問の知識を「定義」と「分割」によって細分化し、それらを、同じく細かく分割した部屋の壁面ロクスのうえに配置してゆく。そしてそれらのトピック分割を、樹形図状のタブローによって視覚的に補強することで、効率的な学習が可能になるという。

そもそも、壁面を無数に分割した部屋が一直線にならぶシエンケルの記憶ロクスは、二分法を繰り返しながらマトリアルを普遍から個別へと分割してゆく、ラム主義のタブローを彷彿とさせる。一般には古典的記憶術を忘却へと追いやったとされるこの種の樹形図タブローが、実はシエンケルによって、建築的な空間構造に翻案されたうえで、独創的な仕方で場所記憶術に取り込まれたと解釈することも可能なのである。

## 第八報告

スキヤンダラスな神の概念　スピノザ哲学と一七世紀ネーデルラントの神学者たち

加藤喜之（プリンストン神学大学院博士課程）

初期近代において思想家たちは、その時代を支配していた神学にかわる全体性の提示を、様々なかたちで試みていた。その内の多くは、中世世界の存在論・形而上学を、部分的に修正したものすぎず、一切を超越した神がすべての被造物を支配する、という構図は変わることがなかった。しかし、一七世紀中盤から後半にかけて、デカルト・スピノザ主義によって、この神と世界との関係に、大きな変化をもたらされる。

宗教改革をふくめた中世までの時代において、無限なる神は、人間理性によって直接把握されることはなく、全存在の原因として、間接的にのみ知られていた。つまり、原因としての神存在を認識することはできたが、神に関する知識は限定されていた。ゆえに、人知をはるかに超えた神と、その神が造った世界を知るには、神が自己を啓示した聖書と、聖書の正統なる解釈者である教会の手ほどきに頼らねばならなかったのである。

デカルト（一五九六—一六五〇）やスピノザ（一六三二—一六七七）の思想は、神概念の革命的理解により、そ

「人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」報告記（小澤）

れまでの世界理解を大幅にかえるものであった。とくに、神と世界を同一視し、世界と知性の間に完全なる整合性を確立するスピノザの神概念は、当時の神学者・哲学者たちを震撼させた。多くのデカルト主義者たちさえも、スピノザ主義をスキャンダラスな危険思想とみなしたほどである。

本発表では、中世と近代のはざままで、神概念に何が起ったのかを検証するために、デカルト・スピノザの神概念に対する、異なった立場からのリアクションを鑑みてい



加藤氏

く。第一部では、一七世紀後半のネーデルラント共和国における、デカルト・スピノザ主義の発展を簡潔に論じる。第二部では、デカルト主義に傾倒した神学者であるクリストフ・ウィティキウス（一六二五―一六八七）による、スピノザの神概念への反駁をしるす。第三部では、保守派哲学者であるゲルハルト・デ・フリース（一六四八―一七〇五）の、デカルト・スピノザ主義が提示する神概念への反論をみていく。

#### 第九報告

フランシス・ベイコンと一七世紀初頭の英国における生命観

柴田和宏（東京大学大学院総合文化研究科博士課程）

一六・一七世紀英国の哲学者フランシス・ベイコン（一五六―一六二六）は、寿命の延長を自然哲学の最重要課題だとみなしていた。彼は、何らかの特効薬によってそれを成し遂げようとしていた錬金術や自然魔術の試みに批判を加え、適切な自然哲学的基礎を確立し、それにしたがって食事や運動の改善などに取り組むことで寿命の延長をもたらそうと考えていた。本発表は、彼の初期手稿『死の道について』に含まれる寿命の延長のための実践と、その基礎にある生命観を分析したものである。この著作では、事物を長く保存するための様々な方法が描かれる。扱われ



公開シンポジウム

## 人知の営みを歴史に記す

中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦

場所: 立教大学 池袋キャンパス 太刀川記念館 3F・入場無料、申込不要

7月6日(金) 15:00-18:00

赤江雄一(慶應義塾大学)

説教と学問的手続き 中世後期における説教者たちの葛藤

小澤実(立教大学)

ゴート・ルネサンスとデンマーク・ルーン学の成立 オラウス・ウォルムス(1588-1655)の著作を中心に

平野隆文(立教大学)

聖餐論(聖体拝領論)をめぐる表象の位相 文学と神学の交錯点(ラブレールからド・ペーズまで)

7月7日(土) 10:00-17:00

坂本邦暢(日本学術振興会)

アリストテレスを教え 16世紀のスコラ学とスカリゲルの改革

ヒロ・ヒライ(ナイメーヘン大学)

霊魂はどこから来るのか 西欧ルネサンス期における医学論争

平岡隆二(熊本県立大学)

パラソの場所 キリシタン布教と宇宙論

桑木野幸司(大阪大学)

記憶と方法 シェンケルの『記憶術の宝庫』(1610年)における叡智の家について

加藤喜之(プリンストン神学大学・院)

スキャンダラスな神の概念 スピノザ哲学と17世紀ネーデルラントの神学者たち

柴田和宏(東京大学・院)

フランシス・ベーコンと17世紀初頭の英国における生命観

当日はブックフェアあり!

主催: 立教大学文学部史学科 共催: 立教大学史学会・連絡先: 小澤実(m-ozawa@rikkyo.ac.jp)

「人知の営みを歴史に記す 中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦」報告記(小澤)

公開シンポジウムのポスター